

滝沢市の一本木界限には「角掛（つのかけ）」の名前の看板が多く見受けられ、実際に角掛（つのかけ）苗字の方が多いと聞いている。今回はこの「角掛（つのかけ）」にまつわる話をしよう。滝沢市の滝沢中学校近くに角掛神社がある。この神社はむしろ滝沢市の天然記念物に指定されている「五龍のフジ」でよく知られている。樹齢がおよそ 200 年から 300 年の老木が 5 本もそろって自然のままに生えているのは県下でも珍しく、その姿はあたかも 5 頭の龍が大空に舞い上がる姿を思わせることから五龍のフジと命名されている。この五



【五龍のフジ初春】



【五龍のフジ初夏】



【坂上田村麻呂】

龍のフジがあるのが角掛神社（つのかけじんじや）である。角掛神社の由来等を調べると興味深い話が出てきた。この神社の祭神は大山祇命（おおやまつみのみこと：山の神）と坂上田村麻呂の二神だ。この角掛神社はもともと一本木にあったようだが、明治二年（1869 年）



【角掛神社の鳥居】



【角掛神社本殿】

十二月太政官令の神仏混淆厳禁及び一村一社に則り、村社として今の所在地になったようだ。そしてこの由緒は、801 年坂上田村麻呂が東夷征伐の時、地元民の先祖であるかもしれない悪路王赤頭兄弟を征伐しさらに北進して、岩手山麓に住む曾長大武丸をも成敗したことによる。この大武丸というのは近郷きっての豪の者で多くの部下を有し、傍若無人の振る舞いを行い村人は大いに難儀して、悪鬼と呼んで非常に恐れていた。田村麻呂がこれを征伐しようとして岩手山麓まで進軍したが、広漠とした原野の中に巨大な木が 1 本そびえ立っていた。この木陰を占拠して戦況を観察し、地の利を考えた戦術をもって勝利することができ国家鎮護のための祝いをもここで執り行った。後にこの地に一社を建立し、將軍

の功を慕いこれを祭る。その後南部藩領となったが、貞享三年（1686年）岩手山が噴火の際に一本木の角掛社殿には、いささかも異変がなかったという。また江戸時代に津軽の殿様が参勤交代で江戸に向かう途中、牛に乗ってこの社前を通過した。すると如何なるハズミかその牛の左の角が欠け落ちてしまった。殿様の隊列は先を急いでいたのかそのままに



【角掛神社の奉納銘】



【角掛神社の境内社】

して立ち去ってしまった。後で地上その欠け落ちた角がそのままあったので、村人これを拾い社殿に掛けて奉納をする。それより誰いうとなくこの神社を角掛神社と呼ぶようになったそうだ。筆者の予測では田村麻呂に成敗された悪鬼の折れた刀でも鬼の角に見立てて、戦勝記念に捧げたのではないかと推測したが、見事に外れてしまった。角掛神社は通常の県道を通している分にはどこにあるかはよくわからない。北上する際に東北自動車道の下わき道を通ると途中左手に赤い鳥居が目立って見えてくる。それにしても田村麻呂の英雄伝説はこんなところまであるのかと思ってびっくりする。もともとあった角掛神社の場所は一本木バイパスと旧国道 282 号線の間にあつたらしい。また、一本木の由来も、田村麻呂の陣地に使った、1本の巨木から取ったものであろう事は容易に推測される。さらに、一本木に角掛さんが多いのも頷けるものである。これからの季節、角掛神社界隈にはリンゴの直売所が数多くオープンしている。岩手のリンゴはどこでも種類が豊富で、しかもリーズナブルな価格で販売している。皆さんも、リンゴを買いに行ったついでに、ちょっと足を延ばして、角掛神社に行ってみませんか？そしてはるか昔にあった田村麻呂の世界に想いを馳せてはいかがでしょうか？田村麻呂伝説は東北各地にあり、福島からはじまり、青森県の下北半島先端の仏ヶ浦にまであるようだ。また八幡平（はちまんたい）の名前の由来も田村麻呂伝説に由来するそうだ。この時朝廷がなぜここまで強引に蝦夷討伐を行ったかについては非常に興味深いものがあるが詳細は別の機会に述べる。当時この東北地域は日本で有数の「金」産地であつたことに起因しているようだ。日本の仏教文化と「金」とは密接な関係にあつたと聞く。坂上田村麻呂のヒーロー伝説は東北各地に存在するが、当時の原住民であつた蝦夷の民にとっては侵略者以外の何物でもない。勝者の正当性を示すためのヒーロー伝説とは思われるが、この各地の伝説を集めることもまた、楽しみの一つである。でも驚いたことが一つある、それは津軽藩の参勤交代に牛を使っていた

ことである。そういえば以前紹介した「塩の道」で、峠超えするような山道には牛を重宝していた事を思い出した。津軽（弘前）から南部（盛岡）までは峠超えや山道の連続である、確かに馬では難儀かもしれないが、牛で参勤交代とはずいぶんとのんびりとしたものであると感じた。これも東北人の大らかさの所以か？